

↑↑
生島遊覽

25
950

025540-000-4

25-950

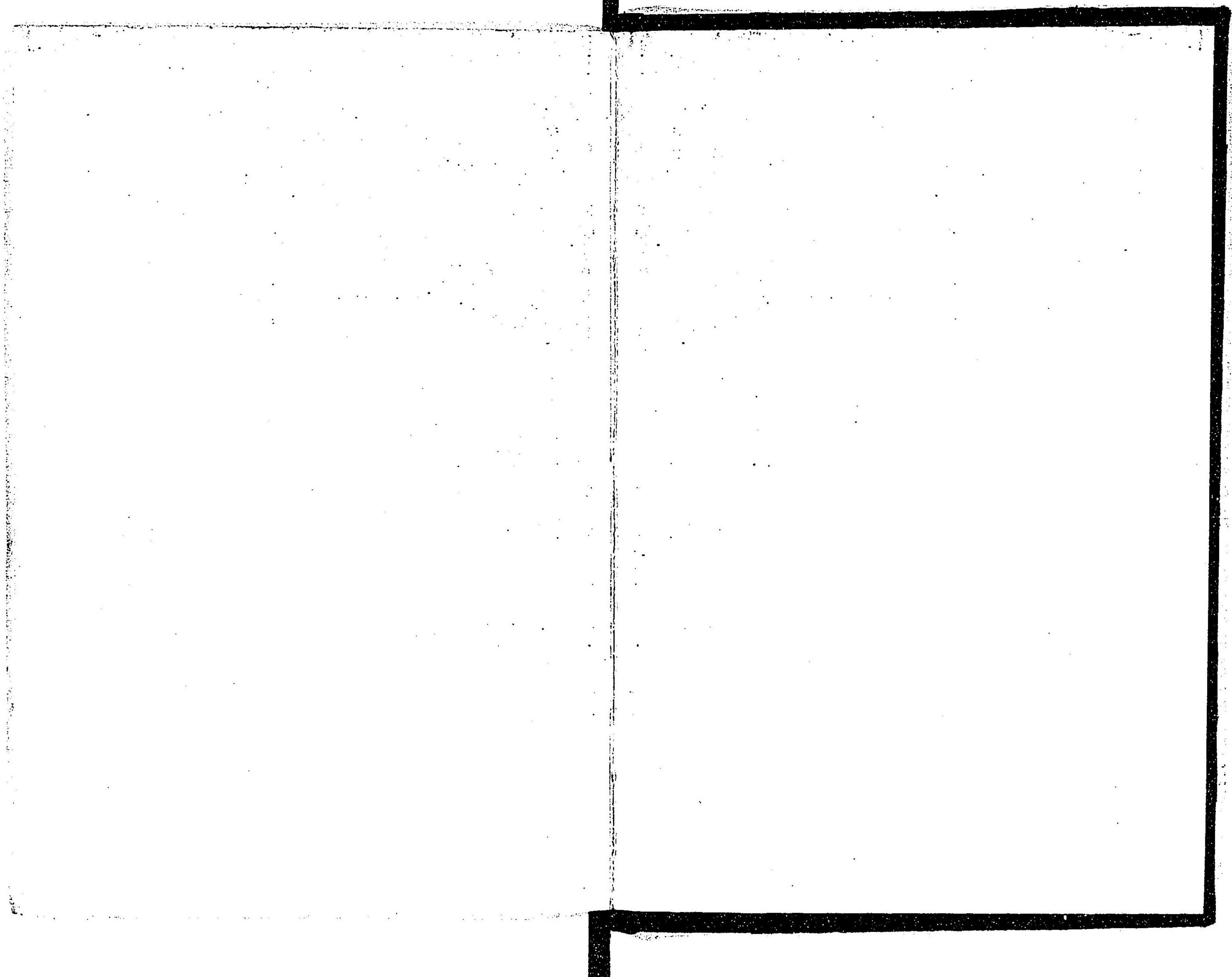
竹生島遊覽

馬場 海寿 / 編

M43

ADC-3028





25-950

湖光島影自怡顏。天女廟高蒼壁間。
眼界三千渺無際。紅塵不到此仙寰。

遊竹生島 正二位通禧題

ふし毎にめぐみをとめし竹かれは

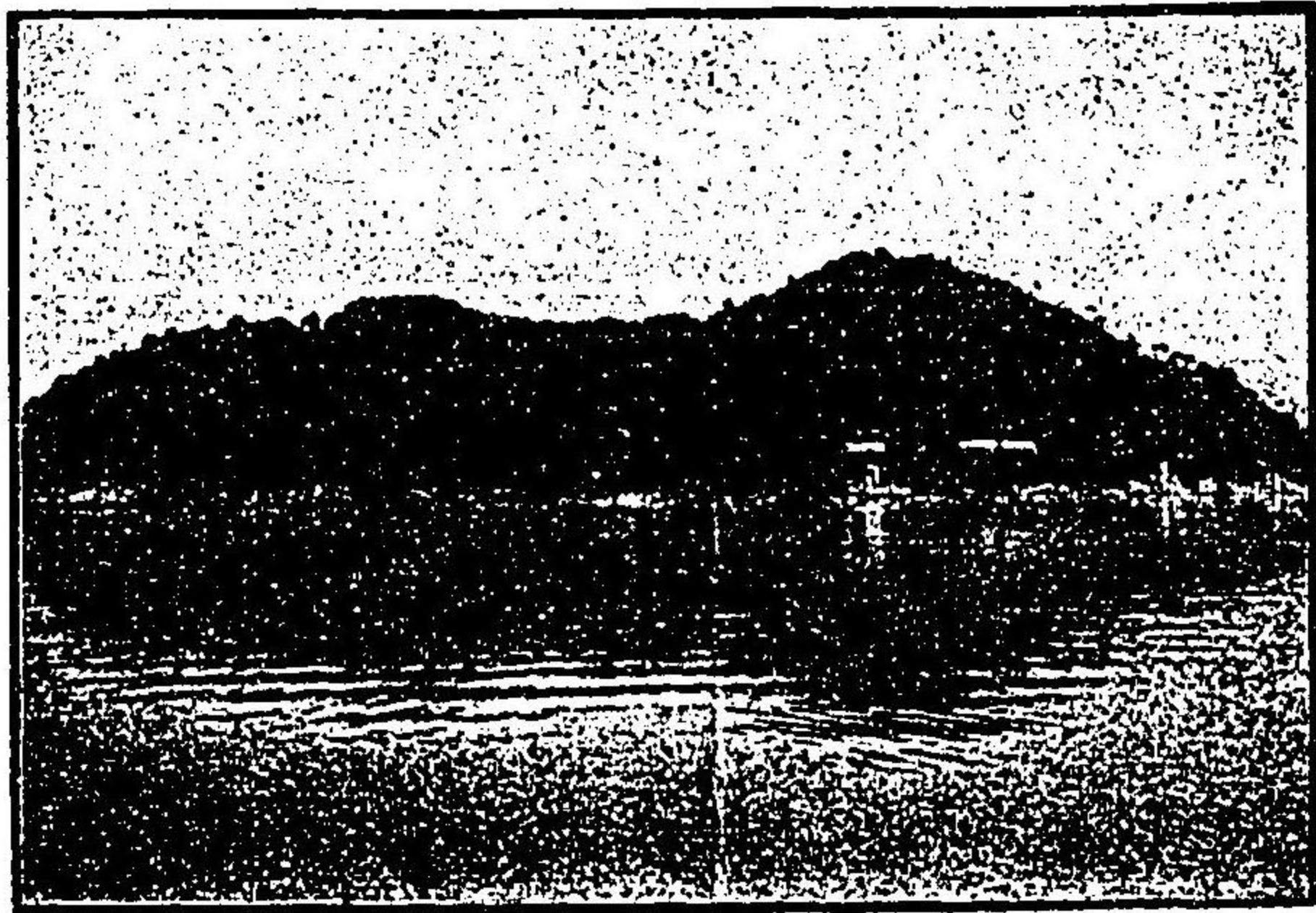
千世萬代もあふき仰かむ

知恩院宮尊超天道親王

あふみの海をかしのつかある誓をば

きはあふくきよりつよまてに

藤原直弼



景全の島生竹
43. 7. 4

はしがき

琵琶の大景と竹生島によりて代表せられる、綠樹影沈むて、魚
木に走る、島の一角に立ちて、竹に生るゝ鶯の音を聞きつと、
七十二峰の山光水色を賞つるのこゝなき樂である、湖國の春
と征いて萬嶽が青葉の風薫るとき、琵琶湖の風光を探るによき
夏を來た、この小冊子と竹生島を訪ふ客にも唯一のよすがであ
る、

新緑の夏六月

小林 橋川

竹生島遊覽

竹生島と云へば、近江の琵琶湖と、もに、又西國三十三所の觀世音靈場として、其他論曲や筆の歌或は太閤記源平盛衰記平家物語などの國史に依りて、普く人口に膾炙せられてゐるが、往々世の人は、此の島の渺茫たる太湖中に存在する一孤島たるを想ふて、常に楸舟の便に頼ることを厭ひてか、今日まで參詣遊覽の客が比較的少かつたは實に遺憾なことである。然し漁舟を雇て湖上數里の波濤を徐に漕ひで渡島參籠した時代とは異なつて、文明の恩澤で、太湖汽船會社の最も輕快な遊覽に適した新設備のある汽船を浮べて、大津彦根長濱其他湖岸の要港から絶へず往復が出來て甚だ便利とあつた。故に船と云へば、直ぐに風波激浪を聯想して、恐れ躊躇ら

ふ老幼婦子の方でも、船中無聊なく、珍しき风光を眺めて爽快を叫てる一
時の間に、竹生島へ到着することが出来るのである。

因に大津よりは湖上十八里彦根よりは六里長濱三里であつて汽船は汽車
と聯絡して數回出帆する。それに乘らは長濱より一時間大津より約四時
餘りて着く故に京阪神地方は勿論岐阜名古屋地方でも樂に日歸りが出
来るわけである。

▲ 総 覽

今は昔。景行天皇十年八月十日一夜に涌出したのが此の靈島である。是に
付いては相傳續紛、輒は荒唐無稽の迷説も唱ふれど其の實は、雲霧開け
此島初て出現したと思はれる。常陸風土記、萬葉集など引証して見へる。

この時不盡山が出来たとの説は信憑し難ひやうである。

竹生島の名稱に付ても種々の變遷があつて、最初智福島、竹飯島、智就島
など言ひ又日本紀略藤川記等には筑夫島と書てあるが、本島相承の縁起に
據ると、往昔役小角神變大菩薩諸國遍歴の砌り、この島へ漂泊せられ修法
すること數旬、一夜所持せられたる竹杖變じて二股の奇瑞竹とある、因て
以て此島は奇隨靈應の權化地である、必ぞや將來佛法興隆の有縁地あるこ
とを感破せられた云々。故に竹生島と稱すとある。疑惑せば制限がきいが
最も事實に近い適説なので、今猶其の靈竹及び奇跡が遺てある
見上ぐれば奇巖怪石巍然として屹立し蜿蜒として匍匐す、宛ら虎の岨に嘯
くが如く、龍の寶珠を竊ふに似たり、蹲あり或は躍る、踞すあり或は倒る
天工鬼斧の美景。海底深く八十尋。山には名物の竹を初め老松古杉繁茂し

と、その間に堂塔伽藍を隠見し、自然の風趣到底筆墨にのぼるべきでもない島より眺望四季ともに又佳景だ。春は老梅に花笑ひ黄鳥謳ふ其の頃から、櫻花爛熳として風士騷客を惚酔たらしむるは更に、霧島躑躅の燃るが如き美観とさたら、全く他に比類おしと云ふても誇り過ぎではない、紫白の藤房また捨がたい賞價がある。総てこれ等の色彩は、琵琶湖の湛然たる瑠璃に映て、淡紅濃白いよく鮮明に、艶麗を競ひ芳香を銜ふさま、亦た何とも盡せん。夏は避暑地として頗る宜ひ。緑樹の露滴たる如き岩蔭に清涼を入る、折さ、波の音琴絃を弄するが如く妙に響て、汀のしぶき軽く面を濕すどきの心地よさ。將た清楚たる湖畔に衣を脱して、漪漣滿々たる天然の浴場に身を翻して泳くどきの心地よさ。或は一葉の扁舟に掉して太湖に遊ばんか、日の一帯長城の流るが如き甕庭野のかきたに落て、殘紅水を彩り

島影倒に映りて、綠は湖心を醜す、黄昏の涼。若し夫れ月の靈峰より涌き出せる刻に至ては、眞に塵界を超脱して、渾然たる大自然と融和する快感禁せざるを得ない。島の眺のうち、優れて佳いは月夜である。殊に仲秋の月は格別よい、玲瓏たる玉兔膽吹の秀峰より湖上に金蛇を走する光景、舟を屏風岩の邊りに漂はせて、賞観する時、古文にある赤壁賦を憶ひ浮で風雅掬すべしである。世に支那國瀟湘の景ありと稱するも此邊を語たのであらう。秋霜一ひ此の仙境に下れば、錦繡を織り出す滿山の紅楓、盡を傾て一日の行樂を恣にする、詩人墨客も少なくない。冬の朝いと清淨なる水晶宮も、かくやと疑ふ銀世界の光景。わけて湖上に山近く、その清姿を眺め、水禽の一群や風を孕む帆おの風情は、全く好油繪の面影であるかくて四時飽ぬ景色に此島はあれど、多く十一月頃より翌年の三月頃迄は

北風暴く吹き荒び、紫瀾碧濤相逐ひ相啗で、獅々の猛るその如く、倭儉云はん方あり、俗に伊吹嵐に比叡嵐と云ふも、此の比の颯風を指したのである。従て參詣の足も比較的方向かなくある、真に閑達幽寂の別天地とあつてしまふが。これを訪ふて仙遊を試むる風客も、相應ある。思ひ出に謠曲竹生島の一節を紹介せん「我れは人間にあらざしてと社壇の扉をおしひらき御比良の嶺風吹くとも、沖漕ぐ船はよも盡さじ、旅のあらひの思はせも雲井のよそに見し人も、おあじ船に馴れ衣、浦をへたて、行く程に、竹生島も見えにけり。綠樹影沈んで魚樹にのぼるけしきあり、月海上に浮んでは鬼も波を走るか、おもしろの島のけしきや」殿に入らせ給ひければ、やがて頻りに鳴動して、日月光り輝きて、山の端いづる如くにて、現れ給ふ天女の御姿、辨財天とは我事あり、その時虚空に樂聞え、花ふりくだる

春の夜の、月にかいやく少女の袂かへすたぐもおもしろく夜遊の舞樂も時すぎて、月すみわたる海づらに、波風しきりに鳴動して、下界の龍神湖上に出現し、ひかりもかやく金銀珠玉をかざせるあたり、我湖國の仙界に於ける神話的傳説の最たるもの、景趣の美と相俟つて其説の面白き事や

▲ 來 歴

抑も當山は今を去ること一千百八十餘年、聖武天皇の御世、天照大神雨寶童子と變裝遊ばされ、陛下に神託して曰く、江州湖中に小島あり、辨財天女降下の地あり、堂塔伽藍を建立して祭供すれば國家安泰五穀豐熟萬民利益多からん云々と、因て神龜元年使を安座岡ある僧行基が下へ遣し、勅命して當島を開基せしめ玉ふ、其功同年六月十五日に至て第一寶殿成る是

に於て遷宮式を執行す、これを巖金山太神宮寺大梵涌樓飛殿宮と勅し玉ひ
（天照太神の神託あるが故に）辨才天女を安置し玉ふ。是れ當島天女祭祀の
濫觴である。同二年二月第二寶殿成功す、是れを巖金山本業寺と勅し玉ひ
千手千眼觀世音菩薩の像を安置し供養式を修し玉ふ。之れ現今の西國三十
番札所の靈場である。其他都卒天の四十九院に擬して坊舎を建立し僧侶を
置て玉體安穩天長地久四海豊饒天下泰平を祈禱せしむ、之れが竹生島巖金
山寶珠寶嚴寺の創立である。但し太神宮寺本業寺を始め其他の伽藍坊舎を
総稱じて寶嚴寺と勅し玉ひし故を以て、目下寶嚴寺一名稱に総括して唱て
をる。

爾來帝數々行幸遊され、又御代々皇室不缺の勅願所とあつて、明治の御
改革までは御撫物とて陛下の御代を御預けに相成り、天女の御寶前に安置
して玉體安穩天下泰平の御祈禱を修し、正五九月には御祈禱札御供物等を
献上して、御檀料を拜授し、御翠簾疊表菊御紋附の御物を賜はつて來た
のである。

延暦七年六月 桓武天皇の勅命を奉じて、傳教大師當島に來て 辨才天を
祭供して叡山の奥之院と崇敬せらる。又弘法大師も練行あらせられ、秘法
を修し玉ふと傳ふ。（其の古蹟今に顯然である）。貞觀二年慈覺大師も師傳教
の遺命に隨ひて寶殿を改修し 天女の御像を彫刻し玉ひ安置すとある、昌
泰三年十月 寬平法皇（宇多天皇）行幸あり、と日本紀略に見ゆ。この時木
工寮を召し三間の宮殿を七間に改め、淺井郡の檢校出雲春雄勅を奉して造
營す、法皇燈明料として勅旨田參町を寄附し玉ふ。貞永元年九月火災あり
寶殿以下拾四箇所坊舎三十餘院燒失す。享徳三年正月また火を失す、當時

この島は天台宗にして粟田青蓮院の宮、寺務を統べたまふ、今亦は青蓮院尊應准后御眞筆の勸進文を存す、文中に「原々夫自金輪際而涌出。以水精珠而凝結。湖波漫々。猶如波璃盤置。一青螺。天水茫茫想見蓬萊島壓。六巨龜。朱樓紫殿。峙於其上。雲窓霧閣列於其中。耳目所觸言語道斷豈直兜攀天宮遠慚論矣。閱風仙閣遙愧離華云云」結構壯觀推して知ることができる。されど永録元年又亦祝融の災はふ所とあり、是等の殿堂及び寶物什器等一朝にして灰燼に歸す。當時國家兵亂の極、朝廷式微住侶爲に百方苦慮して再營を謀れども、如何とも成らざ。會々羽柴筑前守長濱城に封せらる、是に於て再營の事を訴ふ、羽柴氏之を納れ、奉加帳を作て、自ら百石を寄せ、其門葉をして記帳せしむ、薄田傳兵衛、木村隼人祐、淺野彌兵衛、竹中半、等以下奴孃に至る迄、多少の奉加ありしけど、國家多

事の故、其機熟せど、既にして羽柴氏關白とある、其近從伊藤太郎左、及びト眞齋をして、屢々嘆願上訴せしめ、豊太閤また意を留めて、終に果さざして薨也。秀頼内大臣、遺志を繼で業を興し、慶長七年、臣片桐東市正且元をして、普請奉行に任じ、伏見ある桃山殿を移し、改修して堂閣とさす、此に於て事成る。永録元年の燒失以來四十六年を閲して、舊觀に復す現今の神殿佛閣は、即ち之である。詳細に説けば枚擧に遑がかけねば概ね述て筆を次へ遷をであらう

▲案内

海面を突く三百尺。透迤たる石段を刻むこと六十、一の鳥居、二の鳥居、振り返て左が寶嚴寺事務所である。更に數段を経ると、左が月定院と云ふ

坊で、右は巳の月館とて京都巳月講社から建てた、客殿で、此島で曰は
貴賓接待館とでも云はう所なので、其設備が出来てる。往古 聖武、宇多
の二帝が行幸されました、ゆかしき跡を始め、貴顯名士の御参詣、指を屈し
て、盡きざれど、中に就き、詩人都良香、紀貫之、源満仲、平經正、あと
史に傳へて著し。維新後では有栖川大將宮、山縣公、徳川公、山田伯、殊
に黒田侯東久世伯あどが、此の館で都塵を避けて、風遊を極められた、こ
どがある。館の前に鐘樓堂がある、石楯はいよく高く鐵柵に纏て蔭鬱た
る杉の森を潜ると、小祠がある三龍白蛇堂と云ふ、坂は終く。天然の奇岩
鑿りて穿つ如く崎嶇として起伏する、數縫王柏年を経て生し臨四石松世を
累ねて寄す、大傘立傘大鳥毛の名稱ある奇樹あど、到底人工の及ばざる庭
園がある

▲辨才天堂は此所にある。今の堂は假堂で舊妙覺院と云ふた寺あ
だ、詳細は來歴で説明した通り。以前は桃山殿が本殿で安置してあつたの
だが、明治維新の廢佛棄釋あど、物騒寺變革に遭遇した砌り、辨天堂を神
社と改稱し、新に神祇の組織とあつた、め、畏くも 聖武天皇、敬慮し玉
ひし辨財天も、時勢激潮の變遷に左右せられて、其の堂宇を失ふこと、あ
つたので、當時こゝろ有る者、激しき辯説も唱へたあれど、維新の蹉躓、
容易に解結もあらず、兎に角、此の堂に御遷し申すこと、あつた、實に千
載歴史上の一大波瀾で憂てあ次第であつた。
輪奐の美、寶閣の結構、勿論昔日の觀あしと雖も、堂内の莊嚴、森嚴にし
て優美、街ふに密宗瑜伽の道場を以てす 天女の御靈威、ますます、炳然
として輝やき、福德智慧敬愛等、現世的に於る利勝は、遂て赫奕にておわ

しければ、賽者は自ら敬虔の念、禁ぜる能き、篤き信者は全國に將た海外に、漸次に夥しくある傾響である、殊に濃尾及び京阪神地方では、講社團隊を組織して、毎年汽船を買切て、參詣する者多、頗る盛大である。辨天堂を出て西の方へ、晝は薄暮き竹篠の生ひ茂た、隘路を三丁ほど辿ると、一の祠がある、雨寶童子を祀る。此所から北の方へ下りた所が、辨天堂と稱して、古き話に天女降臨、天衣を翻して、舞踏し玉ふと云ふ、靈地である。丁度島の裏で、南風の烈しく、表から上陸の困難ある時、此の濱へ着けて、參詣するのである。又雨寶堂の前から途を東へ登ると、島の絶頂に達す。亭あり四方の眺望頗る佳し、一に望湖亭の名がある、曾て東久世伯來遊せら、伯の雅號そのまゝに、竹亭と命名揮毫せられたより、今は竹亭と云ふておる。かゝて再び辨天堂にひきかえす。此邊むかし、四十

九院坊舎伽藍のあつたらしい。石垣の跡、纒に偉大の俤を傳てをる。聖武天皇の御幸坂と稱する東の坂を下る。その坂を下る迄に、北へ徑路がある。それを進むと、左側に妙音辨財天を祀る小堂がある。おは行くこと五六丁にして小島拜殿がある、此れは、直く向に見える小島に鎮座す、権現様を拜する所である。道が甚だ悪く危険でもあり、強て見物せらる、はどでもまい。話がもどつて、ささの坂を下る中腹に、老杉の下に、天狗堂がある、行基菩薩開基の砌り多くの天狗棲む、一天狗熱く菩薩を懷き、常に法筵に侍て命に隨ふ、菩薩名けて行神房と呼び與ふに法味を以てす、或日房菩薩に告て曰く、「我れ師の法縁に因て、魔界の生を脱して、人天の快樂を受く、今謝するに常島の守護神とまつて、誓て師の業を助けんと」と、その証として生爪を剃て、遺す

故に此所に祭てその名あり。坂の下り詰、東隣に開山堂あり、行基菩薩を安置してある。渡廊の下を潜て拜殿に昇る、建物は古びたれど宏大なるもので、風光のちがめが最も佳ひことは島の内で冠たろう、殊に月を賞する夜はあどは此上もまい佳き場所、俗に觀月臺の名まである。昔都良香が「三千世界眼前盡」の句を吟し對句を考ふるに、「十二因縁心裏空」と天女附け給ひしとあむ。又平經正が琵琶を弾じき「千早振神に祈りのかあへばや」と、よまれたのも、このことであつた。らう。拜殿前に華表があつて此の邊宮崎と云ふ。水さむ近き磐の上に苔色深き五輪の塔がある、聖武天皇供養塔と云ふ、探れば由緒あきならぬと、くどければこれを略す。其他明星跡とて弘法大師の修法せられた遺跡。及び社務所も附近にある。次に導く所は

▲内都久夫須麻神社祭神は淺井姫といふ。創立年代は詳かあらざるも兎に角、維新に於ける神佛分離よりこのかた此の神社號を傳へる様にあつた社格は郷社であつて、その社殿こそ辨財天の舊殿であつた。彼の名高ひ伏見の桃山殿は即ちこれである、説に據ると豊太閤今一舉して支那四百餘洲を掌握せん勢にて、明使揚方享、沈惟敬等と面謁するため特に建築せし便殿がこれあるとか、その結構古雅にして艶麗實に人目を眩すばかり畫は概ね狩野永徳天才絶倫の筆跡、蒔繪は総て高大寺である。秀吉公この殿竣工の日之を觀て且喜悅し且賞譽し日の暮を知らざ、故日暮し御殿の稱もあるこれから説く渡廊及び

▲觀世音本堂いづれも、この桃山殿さので豊太閤偉大の宏業が偲はてる、特に彫刻物類は左甚五郎と傳ふ、その巧妙精緻恰も神工鬼鑿の傑

があるやうである。美術の模範として古社寺保存會では此等殿堂を全部特別保護建造物としてゐる、近時大修繕を起す計畫がある。

月も日も波間に浮ぶ竹生島船に寶を積む心ろして

花山法皇の御詠歌と、もに名高ひ西國三十番の觀世音は即ち此堂に安置せられてある。縁起は來歴で説た通り。靈顯炳焉たること今もは順禮道者の絶へ間なく、薰香の煙、縷々として、盡さざいとゆかしく拜せらる。内陣には寶物數点陳列してあつて、拜觀に使た、寺務所に通すると、雜僧の叮嚀に説明してくれる。

○竹生島根本役行者二股の靈竹○松室仲算大徳寄附立上琵琶の撥（平經正が彈したるもの）○片桐且元筆當島伽藍再建棟木札○秀吉公奉加帳○薄田隼人寄附前机○行神房天狗の爪。以上は前記説明と參照してもらいたい。○國

寶蓮糸刺繡阿彌陀三尊來迎曼荼羅中將姫作○鑑査狀台臘界大日如來座造安阿彌の彫刻○聖武天皇御寄附面向不背之玉○黑紙金泥金剛般若波羅密多經菅原道真筆○靜御前初の音鼓筒源左京大夫持信の寄附○瑠璃瑪瑙の念珠空也上人寄附○水晶念珠仁和寺覺觀僧正寄附○經机一基淺井長政寄附平素は是等の物より出てまい其他に秘庫に澤山所藏せられてある。其のうち重なるものは

○國寶弘法大師請來目錄壹卷○全兆殿司筆絹本着色十六羅漢圖拾六幅○全筆者不詳全釋迦三尊佛壹軸○全全如意輪觀世音壹軸○全惠心僧都筆全彌陀三尊來迎佛壹軸○全光明皇后作蓮糸刺繡普賢十羅刹女壹○鑑査狀附巨勢金岡筆辨才天女出現圖壹幅○全兆殿司筆立上三藏壹幅○全附光明皇后筆雜阿含經など古文書に、古器物に、歴史家工藝家の考証に値ひする物少く

まゐり。毎年九月十五日、十六日には、寶物の虫拂として、一般縦覧が出来るが、其他の日は特に専門家が拜觀を望まれば格別、大概拜觀を許さぬことゝあつておる。

唐門を出ると、古き寶篋印塔があつて。小高ひ場に寶藏がある。右側は西國三拾三所合縮の觀世音堂。役行者堂。護摩堂。納經所。御供所と順にあつて、紀念繪はがき、土産の竹箸などが賣てある。左側は、せうつと石燈籠が並で、若き櫻が其間を縫て植てある、木屑や楠の巨木が千古の薫を誇て銚て樹つ。

島の見物はすんで寶嚴寺事務所の前に歸着して。これから船を備て

▲ 島廻り

すきはち湖上から島の周圍にある、名所を見るのである。東の方から廻ると、觀音堂の眞下二王崎と云ふ小崎がある。次が宮崎で、湖中へ突出して、陸で説た風景の佳ひとろだ、奇しき巨岩のはどり、面白き松の生へてるまど、舟からできけお見られん値うらた。櫓の音軽く波を漕で、一角を折れば、屏風岩と云ふて、眞の六枚屏風を繞らしたやうさ、岩がある。直ぐ向が小島である。神酒岩、八丈岩も通て、大島小島その間の淺瀬に、棹さすのである。此の小島は全く巖ばかりで、矗立した、周圍壹町程の、離れもので、異奇松の、斷面の破山に噛まれて、翼の如く這ふてる風情や、將た水底近く、ぎい、鯉、の幼きさや、はい、もろこ、おどの少なき魚族

が盛に游動してゐる、愛しさ、若し釣糸の用意でも、あるものから、終日歸るを忘れての趣がある（しかし島の西は禁漁區域である。全島は勿論湖水一面禁銃獵である故注意せんからぬ）。毎年節句に島繫の式とて、小島と大島とを大繩で繋ぎ合す式がある、昔、島の一部流れて、瀬田の大日山とあつたから、必^に右の式を執行すると云ふことが、拾芥抄に載てゐる。少し回て大黒岩。次が役行者修行の靈屈に達す、奥深く暗くて物懐ひ、潜に覗くと、点々滴たる水の音響々と、夏は戦ぐ冷たき空氣が、面を拂ふ、俗説には龍宮界に續く神穴だとか。穴かしく。こゝを出て鷺の鼻岩。鯉の瀧登り岩。觀音岩。おどを眺めて、白砂清き辨天濱に着く。春漸く老て杜鵑若葉に鳴く頃、樹の間隠れに、紫白の妖艶を凝し装ふ藤ヶ崎。夏の景色の夕立岩。聞くも恐ろしき盜賊岩。荒神岩や。稚兒の足跡岩とて、む

かじく、磯邊の里より、愛兒に髪を薙ぎさし、この島に携導して、出家沙門に入らしむ、その母情緒纏綿愛を絶つに忍ひせ、潜に來て、兒を此所へ誘ひ、相顧み相擁して泣き、律を犯して魚肉を與へ、慰籍款待、兒を喜はして快し、山神、忿怒、破戒の僧は、之れ見よかしと、岩壞れ、地裂け將に阿鼻地獄の虜とあらんとして、遁れ逃れた、蹠の痕、点々と、今おは岩に刻まれて其名ありと。（又魚喰岩とも云ふ）丁度お伽噺にありそらあ、物語である。七分出て三分残れる笠岩。次が富士岩。屏風岩。最後に笠岩と云ふて、漁船の便のあかつた頃、風波の爲、和船が島に取り着くことが出来あかつた時には、順禮者が笈を此の岩に掛て、御詠歌を唱て去つたと云ふことだ。かくていつしか、小舟は島を一週した。

▲蓮華會

八月十五日、この近在の盂蘭盆の時が、此島の祭禮である。これを蓮華會と云ふて、毎年淺井郡一圓の富豪舊家から、抽籤を以て先頭一人後頭一人の二名を撰で、辨財天尊像を一軀づゝ奉納する儀式である。其法會の清費を納むる大施主にて、これを蓮華の長者と云ふ。その當日頭人は繪羅錦繡を裝飾したる船に、その辨財天を奉安して、音楽を奏し、景氣よき船歌を奏し、うたつて、參詣する、おかく壯觀である、一山の衆僧は、之を迎て莊嚴ある法會を修むのである、即ち蓮華會なのだ。又稚兒の舞とて古式の舞樂をやる。此日汽船は臨時に數度航海する、津々浦々から參詣する、人を載た小船は幾百艘と數づ限りなく、鐘太鼓笛おと囃子立て、漕ぎよせ

或は漕ぎかへる。時々刻々集散する人を以て小さき島は立錐の餘地もなき大賑ひである。

近來杖曳く客の、島には旅館も料理店の如きものも、一つも無き故、随分不自由なきを、啣つ者がある。しかし此方は、都塵を避た仙境として、寧ろ斯く不自由を誇て、却て殺風景的に傾き易ひ、地方設備は、一切せんと云ふのが、頑固ながらも僧坊の意見である。そこに得る云へん、趣味が満ちてあると、賞て呉る人も多ひ。遮莫、來島の人々が晝餐とか、宿泊でもしやうと思ふと、何れも寺務所か社務所へ頼む外は無い。然し事務員は申すに及ばぬ、下男船頭に至るまで、最も懇切に、萬事客に便宜を與へる様、心をかけて居る、故に、決して參詣人の方に、不満足を醸すやうな、失態は無い筈だ、そこは安心して、ゆかれるが宜しい。そこで豫め承知してもら

つとまたひは、寺院は眞言宗旨で祖宗の戒律今もは嚴格であるからして、寺へ依頼にあつた御料理は全部精進物であります。近來船の着た所に、ちよいとした鐘詰壇詰煙草を齧で御客の需に應じてはゐる。測候所の支所や太湖汽船旅客取扱所も設けられてゐる。

(終り)

明治四十三年六月三十日印刷
 明治四十三年七月一日發行

一部定價金 錢

編輯兼 馬場海壽

印刷人 上杉治三郎

印刷所 滋賀縣大津市伊勢屋町第六番屋敷
 合資 近江新報社

滋賀縣東淺井郡竹生村竹生島

發行所 寶嚴寺事務所

